



年上のピアノの先生

~閉室後の、ふたりの連弾~

年上のピアノの先生 ～閉室後の、 ふたりの連弾～【体験版】

蜜夜文庫

く閉室後の、ふたりの連弾く

蜜夜文庫【体験版】

...

第二話 大人のためのレッスン

!|scene|scene01.png)

指先が、かじかんでいた。

残業帰りの午後八時、遠野湊が最寄り駅の改札を抜けると、十一月の夜気がコートの襟から忍び込んできた。街路樹のケヤキはもうほとんど葉を落として、歩道のあちこちに枯れ葉が吹きだまつている。踏むたびに、乾いた音がした。息を吐くと白く濁って、街灯の光の中にゆっくり溶けていく。この秋は、まともに夕陽を見た記憶がない。会社を出る頃には、いつも街はもう夜だった。

二十四歳、社会人二年目。都心のオフィスで、一日じゅうモニターと向き合っている。今の部署に配属されて半年、覚えることばかりで、毎日が背伸びの連続だった。上司の求める資料の水準に手が届かず、作り直しては夜が更ける。慣れない一人暮らしのアパートに帰り着く頃には、何もする氣力が残っていない。コンビニの弁当を電子レンジに放り込んで、風呂も入らずに眠る夜が続いていた。

——こんなふうに、いつまで続くんだろう。

そう思いながら、湊はいつもの帰り道を、いつもと少しだけ違う路地に折れた。工事で通いなれた道が塞がれていて、迂回するしかなかったのだ。住宅街の細い道を、街灯を頼りに歩く。どの家の窓にも、暖かい色の灯りがともっている。その灯りの列の途切れたところに、古い一軒家がぼつんと建っていた。

門柱に、小さな木の看板が掛かっている。

「桐生。ピアノ教室　——大人のためのレッスン——」

湊は、足を止めた。

大人のための、という一文が、なぜか目に残った。子供の頃、ほんの二、三年だけピアノを習っていたことがある。母に連れられて通った近所の教室で、発表会で一曲だけ弾いた記憶がある。指がもつれて、途中で止まってしまうて、それでも最後まで弾ききったとき、客席の母が泣きそうな顔で拍手していた。あれきり、鍵盤には触れていない。もう十五年以上も前のことだ。

なぜ、いま思い出したのだろう。

門柱の内側に目をやると、玄関の格子戸の磨りガラスから、白い明かりが漏れていた。まだ、誰かいる。指先の冷えを、湊はコートのポケットの中で握りしめた。仕事に潰されそうな毎日の中で、ふと、あの発表会の夜の——途中で止まっても最後まで弾いた、あのときの、胸の奥のじんとする感じを、もう一度、思い出したくなった。

意を決して、湊は門をくぐった。

古い格子戸に手をかけると、思ったよりなめらかに開いた。

玄関の三和土に一步入ると、外の冷たさが嘘のように、ふわりと暖かい空気に包まれた。木の匂いがした。古い家の、柱や梁が長い年月をかけて吸い込んできたような、落ち着いた匂い。その奥から、かすかにピアノの音が聞こえてくる。一音一音を確かめるような、ゆつくりとした旋律だった。誰かが、まだ弾いている。音が、止まった。

「――どなたですか」

奥から、女性の声がした。低すぎず、澄んだ声だった。廊下の先の引き戸が開いて、その人が姿を現す。黒髪を後ろでゆるくまとめ、シンプルなグレーのニットに、くるぶしまでの長いスカート。まとめきれなかった髪がひと筋、頬のわきに落ちてゐる。年上だ、と一目でわかる、静かな落ち着きがあった。

「あの……看板を、見て。ピアノを、習えないかと思つて」

湊がしどろもどろに言うのと、その人は少し驚いたように目を見開いて、それから、やわらかく笑つた。

「こんな時間に。……びつくりしました。飛び込みの方は、久しぶりです」

そう言つて、彼女は玄関の照明をひとつ点けた。飴色のあたたかい光が、廊下を照らす。

「桐生奏です。この教室を、一人でやっています。……大人の方の、初めての方ですか」

「はい。子供の頃に少しだけ。でも、もう十五年、触つてなくて」

「じゅうぶんですよ。うちは、そういう方のための教室なので」

奏はそう言つて、湊をレッスン室へ通した。八畳ほどの和室を洋間に改装したらしい部屋に、黒いアップライトピアノが一台。壁際に楽譜の並んだ棚があり、隅には古いストープがぼつと赤く灯つていた。その暖かさが、冷えた頬にじんわり沁みる。窓の外では、木枯らしが電線を鳴らしていた。

「まず、座つてみましょうか」

奏はピアノの前の椅子を指した。長い椅子だった。促されるまま座ると、奏も、当たり前のようにその隣に腰を下ろした。

近い、と思った。

肩が触れそうな距離だった。彼女の側から、香水ではない、洗いたての石鹸のような、清潔な香りがふわりと漂う。湊は、鍵盤に目を落とした。白と黒の並びが、記憶よりずっと鮮明に、そこにあった。

「手を、鍵盤に置いてみてください」

言われるまま、右手を鍵盤にのせる。指先が、白鍵の冷たさに触れた。ひやりとした、なめらかな感触。その冷たさが、なぜか懐かしかった。

「……力が入っていますね」

奏が、そつと湊の右手に、自分の手を重ねた。

息が、止まった。

彼女の手のひらは、ひんやりした鍵盤とは逆に、あたたかかった。細くて、しなやかな指だった。その指が、湊の指の上から、ひとつひとつの形を、優しく直していく。丸く。力を抜いて。人差し指が、こう。薬指は、もう少し。触れる指先の温度が、湊の手の甲に、じんと沁みこんでくる。

「力を抜いて、鍵盤に手を預けて。……そう。手のひらの中に、卵をひとつ、そつと持っているみたいに」

低い声が、耳のすぐそばで言った。その息が、湊の耳のあたりに、かすかにかかる。奏は、たぶん、そんなことは意識していないのだろう。指の形を直すことだけに、集中している。真剣な、まっすぐな横顔が、すぐそこにあった。まつげが長い、と、湊は、場違いにも思った。伏せられたまぶたの下で、その瞳が、湊の指先を、じつと見つめている。

言われるまま、湊は力を抜こうとした。けれど、女性にこんなふうに手を触れられること自体、ほとんど経験がなくて、抜こうとすればするほど、指先に余計な力がこもる。それを見透かしたように、奏は小さく笑った。

「緊張、してます。」

「……すみません」

「みなさん、最初はそうですよ。大丈夫。ゆっくりで」

奏の指が、湊の人差し指を、そっと押し下げた。ド、と一音が鳴る。ピアノの内側で、弦が震えて、その振動が、鍵盤越しに指先に伝わってきた。ただ一音。それだけの音なのに、湊の胸の奥で、何かがふるえた。子供の頃、発表会の夜に感じた、あのじんとする感じが、十五年ぶりに、戻ってきた。

「……鳴りましたね」

奏が、うれしそうに言った。まるで、自分のことのように。重ねられた手が、名残を惜しむように、ゆっくり離れていく。離れた手のひらの温度が、湊の手の甲に、まだ残っていた。その、ほんのわずかな温もりの喪失が、なぜか、湊には、少しさびしかった。

「不思議ですね」

奏が、鍵盤を見つめたまま、言った。

「たったひとつの音でも、その人の、いろいろなものが出るんです。せっかちな人、丁寧な人、迷っている人。……湊くんの音は、まっすぐでした。まじめな方なんですネ、きっと」

たったひとつの音で、そんなことまでわかるのだろうか。半信半疑だったけれど、まっすぐ、と言われたことが、なぜか、うれしかった。会社では、要領が悪い、不器用だと、そればかり言われている。そのまじめさが、ここでは、まっすぐ、と呼ばれる。それだけのことで、湊の胸の、ずっと縮こまっていた部分が、ほんの少し、ゆるんだ。

「今日はもう遅いので、少しだけ。ドレミの位置と、指の形だけ、覚えて帰りましょうか」

三十分ほど、湊は根気よく教えてくれた。湊のぎこちない指が同じ音を外すたびに、彼女は急かすでもなく、もう一度、と静かに言った。ときどき、また手が重なる。そのたびに湊の心臓は跳ねたが、湊のほうは、それがごく自然な指導の一部だという顔をしていた。ストーブの赤い火と、木枯らしの音と、たどたどしいピアノの音。それだけが、部屋を満たしていた。

「――今日は、このくらいにしましょう」

気づけば、九時近くになっていた。

「すみません、こんな時間まで。俺、仕事が終わるのが、いつもこのくらいで」

湊が恐縮すると、湊は椅子から立ち上がって、少し伸びをするように肩を回した。

「いいんですよ。……うち、最後の時間は、いつも私一人だけなので。ゆっくりできます」

そう言った横顔が、飴色の照明の中で、ほんの少しだけ、さびしそうに見えた。ひとりで教室を守り、一日の終わりの時間を、いつも一人で過ごしている――その静けさを、彼女がどう抱えているのか、湊にはまだ聞けなかった。聞くには、今日、会ったばかりだった。

次回の予約を、来週の同じ時間に取った。奏が古い紙の台帳にペンを走らせる。その手つきの、まつすぐな美しさを、湊は横で見ていた。

帰り支度をしながら、湊は、ふと、壁の楽譜棚に目をやった。ずいぶんたくさん、使い込まれた楽譜が並んでいる。子供向けの教本から、湊には題名も読めない、分厚い外国語の楽譜まで。その背表紙の一冊一冊に、この人の過ごしてきた時間が、詰まっているように見えた。

「先生は、いつも、この時間まで教室に。」

「ええ。最後のコマが終わってからが、いちばん、好きなんです。誰もいなくなった教室で、少しだけ、自分のために弾いて。……それから、家に帰るんです」

「家、遠いんですか」

「いえ。……ここの、奥が、私の住まいなので」

奏は、レッスン室の奥の、閉じた引き戸を、目で示した。この古い一軒家で、教室を営みながら、一人で暮らしているのだ、と湊は知った。誰もいなくなった教室で、たった一人、自分のために弾くピアノ。その音を聴く人が、誰もいない夜を。想像すると、なぜか、胸の奥が、きゅつとなった。

「では、また来週。……お仕事、無理しすぎないでくださいね」

見送りに玄関まで出た奏が、格子戸のところでそう言った。生徒への決まり文句だとわかっていても、その「無理しすぎないで」が、疲れきった湊の胸に、じんと沁みた。

格子戸が閉まると、外の本枯らしの音が、また、戻ってきた。ふと振り返ると、磨りガラスの向こうで、奏の白い明かりが、まだ灯っていた。あの人は、これから、誰もいなくなった教室で、一人、自分のためにピアノを弾くのだろう。その音を、聴く人が、誰もいない夜を。奏は、なぜか、その明かりから、すぐには目を離せなかった。

外に出ると、本枯らしが頬を刺した。けれど、レッスン室の暖かさが、まだ体の芯に残っていた。夜の住宅街を駆へと歩きながら、奏は右手を、コートのポケットから出して、街灯にかざしてみた。奏の手が重ねられていた、この手。もう何も残っているはずがないのに、そこにまだ、あのあたたかい指の温度が、残っている気がした。

——ただの、レッスンだ。

自分にそう言い聞かせる。相手は先生で、自分は生徒で、あの手の重ね方は、きつと誰の手に対してもおなじなのだ。わかつている。わかつているのに、電車のつり革につかまった頃になっても、奏の頭の中では、今日鳴らした一音が、ずっと鳴りやまなかった。

ド、という、たったひとつの音。

その一音の残響が、家に着いても、風呂から上がっても、布団に入っても、うすれるだけで、消えなかった。灰色に塗りつぶされたこの秋の中で、来週の火曜の夜。その一日だけが、そこだけ、ぽつんと色がついているように、思えた。